

春の園藝

東京女高師教諭 竹 島 茂 郎

昨年の秋私は「球根類の植ゑ込みと掘り方」と云ふ題で園藝の一端を述べた事でありましたが、其の當時植ゑ込んだ筈の水仙やチユリップやヒヤシンス等は唯今花壇を賑はして居ることでありませう、是等はやがて春がたけて来てそろ／＼木蔭がしたはしい頃になると、地上の部分は枯れ初めますから其の前に掘り起して涼しい場所に貯へる必要があります、唯今の仕事としては、掘り取つて穴倉に貯へたダリーヤやグラジオラス「ゆり」等をそろ／＼取り出して圃場へ植ゑ込む必要があります、そこでダリーヤに就ては昨年も申した通り「いも」につけてある短い莖部から芽が出やうとして居る筈でありますから、能く注意して株を切り分ける必要があります、之を若し切り分けしないで其のまゝ植ゑ込みますと、芽が込合つて出て来て丈ばかり高くなつて花が著きにくいものであります、左様な譯でありますから、かりに一つの株に大きな「イモ」が三つある場合には、

芽の數をよく吟味して三つ以上あるときは、三つだけを残す様にして缺で以て株を切り分けて、一つのものに一つの芽と云ふ風に三株にするのであります、一般に下等のダリーヤ程芽の數は多いものであります、左様な種類はドシ／＼芽をもぎ取つて數を少くするのでありますが、上等のものになると芽が割合に少いものであります、若し「いも」が三つあるのに芽が二つしかない場合には、兎に角一つの芽には「いも」を一つ他の芽には「いも」を二つ著けて置くこと云ふ様に致さるべきであります。

株を切り分ける節誤まつて芽のない「いも」が出来た場合によき芽を接ぐ方法もありますが、之は中々手際を要するものであつて、一寸紙上で説明するところが困難であります、又株を分ける場合に芽を落す様なこともあります、左様な場合には之を挿芽さきめにして新株を作ること出来ず、挿床さしどこは砂地が宜しいのであつて、場合によれば鉢に砂を入れて之に挿し、

日蔭に置いて時々温氣を與へて世話をすれば宜しい、左様にするに程なく根を出して元氣を恢復するのでありますから、やがて注意して掘り起して圃場に植ゑ込むのであります。

グラジオオラスは秋の時にも述べた様に、昨年植ゑたあとへ植ゑることは禁物です、必ず新しい土地に植ゑなさい、さうして油槽等の肥料を比較的豊富に與へることが必要であります。

「ゆり」の類には「てつぱうゆり」「かのこゆり」「すかしゆり」「をにゆり」「やまゆり」「ためともゆり」「たけしまゆり」「くろゆり」「くるまゆり」等があります、其の中「くろゆり」「くるまゆり」は平地には一寸作りにくい種類であります、「ゆり」の花壇を一つ特別に作つて置いて、色々の種類を一緒に植ゑて置くことも一興であります、是等の球根(鱗莖)は比較的深く植ゑる必要があります、「ゆり」の類も比較的肥料を豊富にやる必要があります。

種子物類としては、「げいごう」「あさがほ」「おしろいばな」「おじぎやう」「ひやくにちさう」「コムスモ」「ほうせんくわ」又は二十日大根、「こかぶ」「ちんぷり」「へちま」「へうたん」「なんきんまめ」

「さくげ」「なたまめ」等は面白いと思ひます、「さうり」には節成とて大層結實の豊富な品種もありません、「へちま」には「大長へちま」とて二三尺になる品種もありません、『世の中をなんのへちまと思へどもぶらり』としては暮らせもせず」と云ふ狂歌は一寸面白いですが、「へうたん」としては「千成へうたん」は比較的興味の多いものです、「なんきんまめ」は花が咲いて夫から花軸が根の様伸びて、地下にはいつて實と結ぶことなど誠に面白いものです、殊に此の「なんきんまめ」の葉は睡眠運動とて、夕方になるとつぼんで夜があけると元氣よく開くことなど、子供に觀察させるのによい事例であります。

さく柳さして幾日も経ぬものを

根ざしひきみる友わらわ哉

言道